

新著紹介

○郷土地理の觀方

三澤勝術著 古今書院發行

定價一圓九十錢

菊版一九六頁 挿圖六十五といふさゝやかな美本である、其記述する所は三澤氏一流の郷土地理の見方である、三澤氏の見解に従へば地理學は地域性を究むべき學問であつて、その地域によつて産み出され且つ育まれて居る眞の地表現象のみから純粹の地理學的景觀を構成する學問である。そうしてその個性の明瞭な記述に努力すべき學問である、従つて氏の見解に従ふときは、ある人文現象のごとき、たとへ其地域に於て二、三百年間も存在した民家の一つの相の如きものもそれが全く歴史的原因であり人文的原因である場合には之を除き去つて、地理學的景觀に取り入れないのである。たとへば諏訪地方の風籠垣、飯山地方のすがき、飯山盆地のタテノボセ、諏訪地方の平石屋根等、全くその地域の氣候（卓越風、多雪）又は産物等によつて直接に其地の産んだことの明かな現象は之を主要視するが同じ八ヶ岳南麓の農村部落でありながら諏訪郡に屬する部落は、草葺寄棟の家をもち、甲州の北巨摩郡に入ると草葺入母屋にかはる、この際三澤氏はこれを今の處地理的即ち地域性に即して説明する能力を持たない、恐らく藩政時代の相違だとのべてゐるやうに、或は諏訪伊那

地方の聚落中に散見せらるゝ板葺切妻式の本棟造とか破風屋とか呼ばれる民家の如きは、今の所吾々には是をその地域性に關係づけて説明が出来ないとのべてゐるのである、つまり三澤氏の見解に従へば、地理學的といふことは徹頭徹尾著地的であつて、餘程窮屈なものであるらしい、そうして三澤氏はかうした峻別嚴撰によつて地理學的景觀の地域を定め、明瞭に説明することが地理學の目的であると解釋してゐるのである、故に曰く

其地域の地理學的研究の最終の目的としては是迄何回となく繰返してのべて來た如く、その地域性を究めることである、しかしそれは仲々困難である、現象其儘では分布が不純であり不完全である、地理的に説明の出来ない分布現象を見せ、てゐるから、之を素直に地理學的に説明の出来る様な、純地理學化すべき加工が必要である、と

故に三澤君の地理學は、説明學であつて、都合のよい景觀のみを撰定抽出して、その地域性で解釋するといふことに落付くのである。従つて氏の本著に示めした二三の分布圖、及その作り方の如き、いかにも立派であつて明晰なことは敬服に堪へぬものである。

併し果して地理學といふ學問は、氏の所謂景觀構成といふ大事業を仕とげて地域そのものを確定する事が目的なのであるか、地域は學者が確定するよりも既にききに自然がつくつてゐるのではないか、景觀といふものがそれ程蒐集した上で

撰別しなくてはならぬものとする、地表現象を説明する地理學といふものは、あまり御都合主義なものになりはしないか、地域研究の過程といふ章に於て三澤君の目的は、右の景觀の完成を第四段とし、第五段にそれを普遍化することを以て最後の目的としてゐられるが、果して普遍化が出来るものであらうか、元來地理學といふ科學はさうした學問であるべきであるか、我等の實際の生活に、さうして我等の人格にまで影響する地理といふものは氏の抽出した景觀といふもので、説明がつくものであるであらうか。

本書第二篇に地理教育といふのががあるが、氏は地理教育とは地域的觀念の養成にあるといふことをのみ強調されてゐるが、予の考ふる所によれば地域觀念の養成はやがて郷土愛とか愛國心とか、國家觀念の養成とかいふ地理教育の眞目的に導くべきであつて、小學校では少くとも一村親和の生活に適應するやうに幼年者を指導するのが目的である。地域的觀念を養成しよへすれば、それで郷土教育は全く終ると見るべきではなからう、而もその觀念から、日本といふ國を理解しやがて世界に於ける日本の位置といふやうなことを教へるのが地理教育なのではないか。

本書を讀んで予は三澤君の地理學的景觀といふものが、あまりに小さいことに失望する一人である、敢て苦言を呈して批評とする。(藤田)

○郷土地理野帳 東木龍七編纂

新著紹介

本年三月膨大なる「地誌學」一卷を著した東木氏は九月には「郷土地理野帳」をものし、更に引續いて「郷土經營學」「初等經濟地形學」などの著作も刊行されつゝある由、まづ氏の精力に敬意を表さずには居られない。最も近くに發表された氏の論文「地誌の研究」(郷土科學講座は氏の思想を要約したものと見得るが、それには地誌學を組織していささか世に問ひ、郷土地理野帳を編纂して郷土經營の野外研究法を公表し理論の應用を豊富にした云々と書かれてゐて、氏が嘗て評者に語られた出版の理由とは全然異つてゐる。それはここに貰むる必要もないが、氏自ら語る如くこれら二著が學界に提出されたものなる以上、我等がこれを黙殺するは非禮の甚しき次第なれば、誌上に於いて批評を加へんとするのである。

本書外観は地理調査のフィールド、ノートのやうであるが内容は耕地、住居、生産、人口、財力の五要素(氏はこの五つの要素が地域を代表し、地誌とはこれらであると考へてゐる)について調査するので、これが氏の郷土地域の人文地理即ち郷土地理だそうである。(郷土地理なるものについては大いに疑を存するものであるが茲では省く)そして野帳の使命を説き、調査の準備法、主要項、整理法、演習案といふやうな四編が續いてゐる。

第一編に於いて目を惹くは極めて獨創的な人文地理學の分類である。即ち本書では人文地理學は地誌學と地政學の二分科をもつ。然し前著「地誌學」には人文地理學は地誌學と經

濟地理學の二分科を有すとある。僅か半年の間に經濟地理學が消失した事は重大な出来事であるが、氏はこれについてその後の多數の述作物の中で一言もふれてゐない。又地誌學は更に理論地誌學と郷土經營學とに分たれるのだそうであるが前著「地誌學」中には郷土經營學などは勿論、郷土といふ文字さへ一つも見當らぬのは如何なる譯であるか。某々氏の如く最近の出版界の趨勢から「郷土を食ひものにす」といふ非難が當るかもしれぬ。猶又郷土經營學は郷土經營論と郷土地理野帳に分たれてゐるが、ノートが學問の一分科であるとは、鉛筆やエムが學問の一分科であるといふに等しく、大いに珍妙ではないか。

第二編の調査準備法は極めて簡單であるが、例へば「財力についても以上の方法に準じて、財の分布を分類によつて示すことが出来る」といふ一句で重要なべき要素の一を片付けてゐるが、これでは何にも理解出来ないのを遺憾とする

第三編調査の主要項は最も詳しい部分である。地形、土壤、耕土、地形價值、耕地經營、住居經營、生産經營、人口經營、財力經營(あと三者は何を意味する言葉か一寸理解し難いが)について書いてある。細い議論は姑くおき大所より見るに、ここに大きい錯誤がある。それは例へば土壤は大いに地理の研究には必要であるが、土壤學者の仕事をも代行すべきものであらうか。土壤の分析は土壤學者に任すべきではないか。農學の實驗をしたり地價の査定をしたり、何でも土地に關したことを根本までつきすゝめて行ふといふ事は無益なことだ

もあり不可能なことでもある。この錯誤は「地誌學」にも犯されてゐるが、ここでもそれらの實驗を強調してある。

第四編整理法は僅か二頁であるが、結局以上のものを記述せよといふのである。第五編調査の演習案といふのは幹部演習とか協定演習とかいふ名目がつけられてゐて、今夏茨城縣に於いて實施した案を書いたものであるが、「完全に實施せられた」そうであるからその結果を早く拜見したいものだと思ふ。唯評者自身の意見をここに述べることを許されるならば、此の如き何等の目標なき聞き調査が何を齎すか、それは雜然たる羅列以外には出でないと思ふのである。猶かくの如く何の關係もない茨城縣へ行つて調査してもそれを郷土地理といふのであらうか。日本語の郷土といふのはある特定の意味をもつた土地であつて、任意の土地をいふのではない。

最後に二三附言するならば、氏の調査は「目下の如き貧苦に迫れる地方の農村を何とかして救ひたいと思ふことから生れたもので(中略)財源があるならば先々生産増進の方面へ使ふ様にしたいと主張する」のだそうである。そして「生産増進と生産物處理とは別々に考へた方が便利で農村では生産物の増進が一般に望ましいのである」といつてゐるが、生産物の處理を考へないでどうして貧苦の農村が救へるのか。氏は恐らく豊作飢饉といふことも知らず、現下の世界經濟にも何の關心もなく、又三種の人口密度とか、農村收益の分配人口とか都市人口の分散法とかいふこと等より見て、氏は最も素朴單純なる重農主義者らしい。猶經營といふ字を好んで使用す

るが今日經營經濟學、農業政策などの學問があることを知つたなら、氏の地誌學と稱するものは何分残るであらうか。

次に氏の文字の使用が甚しく不當である。今日現存する地誌に對して、全く異なるものであり且つ極めて偏つたものを地誌學と稱するは内容はともあれ、名前としては不適當なることは既に小倉博士の説かれた所であるが、同様に人口經營、地誌經營の如きも今日の經營といふ字意ある以上他に名目を附すべきではないか。又氏の術學的文字的の使用としては街村といふのを長方形型の住居群、日本の町村といふのを特に日本群島の町村（日本群島の多くの島々のうち町村をもつのは日本内地だけだ）といふが如き唾棄すべきである。

最後に氏は「地誌の研究」に於いて「人文地理學中に地誌學なる一大分科を創設し云々」その他到る處に「學問の創設者」なる名譽を恣にしてゐるが、創設とか獨創とかいふことは今日の常識及び通説を一通り検討してから生ずるものではないからうか。地誌學を以て人文地理學の一大分科なりと主張する以上、今日學界に於いて認めらるゝ分類を打破すべき名論卓説を掲ぐべきではないか。評者は決して所謂喧嘩腰を以て批評に臨むものではない。氏が教室の會計係助手として精勵その職にある傍、刻苦獨學して幾多の論文をものせらるゝは全く敬服するところであるが、最近の氏の論調はドグマか官學的術氣か甚しく學問的墮落を來してゐると思はざるを得ない。氏の爲に誠におしみ敢て苦言を呈する次第である。又出版元たる古今書院は優秀の地學關係書を刊行するを以て名

あるものであつたが、最近しきりに低調なる書籍を刊行するは不況の折柄とはいへこれ亦遺憾である。（石田龍次郎）

○斐伊川三角州發達の研究

鳥根縣岡重著

定價四十錢 今市 伊藤印刷所

蘆川郡出東村小學校に奉職されてゐる岡重氏は、その居住地の新しい沖積地の發達に對して、住民がどういふ努力をしたか、どういふ經路で新しい村を作つてゆくか、即自然と人間との土地に對する密接な關係を明にせんとして、この珍らしい冊子を世に問はれた、歴史的研究の結果が十分に働いてゐることは申迄もないことである、菊版七十四頁挿圖十二、地方研究家にとつては珍らしい參考書である。定價四十錢は實に實費である、出雲今市町一六三七、伊藤印刷所でうつくられる。（藤田）

雜報

○日本南阿聯邦貿易

南阿大藏省發行の貿易統計によ

れば一九三一年一月乃至三月の三ヶ月間に於ける南阿聯邦總輸入額は千三百九十萬五千磅に達し前年同期の輸入に比し三百四十萬磅を減じた、そのうち勿論英本國及各殖民地から約七百萬磅を輸入した米國は約二百萬磅、獨逸は八十五萬磅について日本第四位をしめ四七八、四八八磅に上つた、その割合昨年度の二・六%に比して、三・七%に増加した、その輸入